谷という意味である。（『神岡の地名　四』より）

本節では、はじめに、下麻生野から数河への信濃街道の道並について述べ、次に、下麻生野から奥麻生野への道並について述べる。

（1）信濃街道（殿～下麻生野～数河）

山本一三さん、若田鉄造さんに案内していただき、昔の道筋を探索した。

信濃への道は、高原川を挟んで東西（両岸）にあった。東側は、藤波橋東町側の袂から、殿を通り、坂巻で山之村道と分岐し、麻生野方面へ進む。途中、和佐保川の不動滝の下手にあった坂巻不動の所で橋を渡り、高原川左岸沿いに進み、現神岡鉱山浄水場の付近で麻生野に入る。

信濃街道跡（神岡部品の下）

坂巻と麻生野との境は、「なりいわ」といい、昔の絵図面に出てくる大岩の下を這うように道があった。素掘りの道で、明治になると麻生野小学校へ通う殿や和佐保の子供たちの通学路で、大雨が降ると道が荒れ、賦役で道直しをしたという記録がある。

「なりいわ」から、「木場ヶ淵」の崖の上を通り、麻生野谷の「そうこう橋」を越えて、現在の渡辺さんの家の所から両全寺の山門前まで一定の勾配で上がっていた。

寺の前を通り、地蔵堂・十王堂・元麻生野学校跡を過ぎて分岐する。信濃道は、ここで右へ進み数河へと続く。明治になって小学校が出来てから、通学路として整備された。

神岡部品の表側の道下に、昔の道跡が一〇〇㍍ほど残っている。道上には、かつて寺や神社があったとのこと。

○道路の変革

信濃街道は、明治三十年（一八九七）頃に、大改修が行われたようである。麻生野地内では、そうこう橋を渡った後、両全寺の方へ上らずに、現酒々井商店の所から麻生野段丘の高原川側の麓沿いに数河へ行く道が開削されたようである。現在の国道筋である。

○両全寺

この寺は龍の寺と呼ばれます。雌龍が双六谷黒渕にいたという悲恋の伝説からそう呼ばれます。本堂に入ると、龍の寺の名のごとく、本尊を取り巻く形で、左右のふすまに墨で描かれた龍が見えます。寺伝によれば、麻生野右衛門大輔直盛が創建したといわれます。桃源周岳和尚を請じて開山しました。直盛は永禄七年（一五六四）に逝去し、位牌は寺に納められ。供養塔も有ります。昔は日月山

両全寺と言っていました。のちに高山の臨済宗宗猷寺末となり。明治二十三年（一八九〇）年には妙心寺末となりました。十世詳隠和尚のとき、焼失し、十一世文溟和尚の代に現在地へ移転しました。鎮守堂には、遠州奥山半僧坊の分霊を安置しています。本尊の千手観音菩薩は秘仏とされ、開帳は六十年に一度です、本尊が納められた厨子の前には、前仏として千手観音菩薩像が置かれています。円空作の薬師如来像も安置されています。

両全寺山門

（『飛騨三十三観音霊場』より）

○寺

両全寺（高山宗猷寺末寺）創立享禄二年（一五二九）開基は、江馬一四代時経の二男麻生野右衛門大輔直盛。この地に両全寺を建て、桃源を開山とし、慶雲山と号す。元禄五年（一六九二）新堂に作り改めた。文化十一年（一八一四）に今の場所に移転したという棟札が出ている。以前は新井さんの上にあったが火事にあったらしい（天明～寛政頃）。寺の移転は麻生野の斎場手前の共同墓地の辺りを予定したが、井戸が掘れず断念し、今の場所で井戸を掘ったら夏も枯れず、この場所に建てることになった。

火事で全焼と聞いていたが近年、三間四枚建ての襖の下張りに花押が書かれているという話があり、剥がしたら文化八年より前の古文書が出てきた。高山宗猷寺や国府安国寺とのやり取りや、高山の役所の届け出の控えなどが下張りになっていた。このことにより寺は全焼と伝えられていたが、一部消失を免れた物があったのではないかといわれている。

両全寺半僧坊

○半僧坊

境内に祠がある。大正の終わりに建てられた。

明治十六年（一八八三）遠州奥山の半僧坊の分霊が安置された。

半僧坊は諸願成就といい、いろんな悩みや願いを聞いてもらえる権現様なので、神であったり仏であったりす